

高専英語とJABEE

仙台高等専門学校総合科学系文科 教授 武田 淳

はじめに

「学問を教える工学教育から、技術者を育てる技術者教育への転換を実現し、かつ日本の技術者水準を国際水準に整合させること」を目的として日本技術者教育認定機構JABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education) が私たち高専教員の前に現れたのは、二〇〇一年のことでした。

私の勤務校である宮城工業高等専門学校(現・仙台高等専門学校)は全国高専の先陣を切って二〇〇二年度に五年審査を受審し、専攻科の「生産システムデザイン工学」教育プログラムの首尾よく認定を受け、以来、計三回の審査を経て現在に至ります。

この期間、私たち高専はJABEE審査のほかにも認証評価や学位授与機構にかかわる複数の審査を受け続けているわけですが、全

国四地区八高専で組織の高度化再編が行われたこのタイミングに、高専英語教育とJABEEのかかわりについて再考することは意味のあることと考えます。

JABEE理念の再確認

前述の通り、JABEEの設立目的は技術者教育の充実であり、そのために各教育機関が自ら掲げた目標を実現するに足る教育活動をいかに実践しているかが審査の対象となります。おなじみのJABEE基準1の(1)の八項目を改めて見てみましょう。

(a) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養

(b) 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解(技術者倫理)

(c) 数学、自然科学および情報技術に関する知識とそれらを活用できる能力

(d) 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを問題解決に応用できる能力

(e) 種々の科学、技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力

(f) 日本語による論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力

(g) 自主的、継続的に学習できる能力
(h) 与えられた制約の下で計画的に仕事をすすめる、まとめる能力

この中で私たち英語教員が直接かわるのは、主に(a)と(f)です。とりわけ私たちが戸惑い、首を傾げたのは(f)でした。「国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」を、どう説明・証明すればいいのか。

導入時の JABEE の審査方法にはやや「揺らぎ」とも言うべきものが見られ、やれ A 高専では六〇点以上の答案すべての提示が求められたらしい、やれ B 高専では在校生に英問英答が課せられたそうだと、私たちも右往左往の感がありました。そんな中で最も大きな関心を集めたのが「英語力の定量化」でした。

現場の私たちには、そのような定量化が極めて困難であること、また、限られた測定方法による定量化そのものにはさほど意味がないことがわかっていただけに、「コミュニケーション基礎能力」を証明する指標の選定には迷いました。

英語指導と JABEE の接点

そしてほとんどの高専が指標として選んだのが、TOEIC でした。実用英語技能検定（英検）や工業英検が大きく級ごとに包括して能力を表示するのに対し、五点刻みで細かく表示されるスコアはいかにも日本人好みで、学習者の英語力を正確・詳細に弁別している印象を与えます。

実は TOEIC 本部が発表しているマニュアルには、例えばスコアが五〇五点の学生と五〇〇点の者との間には能力に目立った差があるわけではなく、二〇（三〇点前後の大きな枠で捉えるべき（ゾーニング zoning））という解説があるのですが、しかし、五点刻みのスコアの印象は強烈でした。

結果、TOEIC 試験を学内実施する高専は瞬く間に増え、現在では全国五五高専中実に三五校が何らかの形で受検を義務付け、二一校が学内で TOEIC IP を実施するまでになりました。（四校未回答、二〇〇九年十月五日現在…全国高専英語教育学会 COCET 調べ）

また、二〇〇九年度高専英語教育学会京都研究大会においても、TOEIC に関する指導は多読指導やラーニングとともに大きな研究テーマとして扱われ、多数の優れた実践報告がなされています。

英語教育にもたらした恩恵

そうした研究発表で最近よく見られるのが、TOEIC 教材を積極的に活用した実用英語の指導報告です。

大学受験を控えた普通高校とは異なり、高専生の英語指導においては、いかにして学習者のモチベーションを刺激するかが普遍的なテーマですが、ここきて JABEE 受審の方策として始めた TOEIC を教材として発展させ活用する取り組みが見られるようになりました。

かつては TOEIC の過去問の解説に終始しがちで、そのため授業を外部試験対策に使うことの是非が論議を呼んだこともありましたが、リスニングや準長文問題などに英語教師がそれぞれ独自の工夫を凝らして効果的指導を展開している実践報告に触れると、これ

らは JABEE 受審がもたらした恩恵とも言ふべきものであると思えてきます。

また個人的には、ともすると散逸しがちだった教材や試験問題・答案などを統計的に管理するようになったことも、JABEE 受審の副産物です。

恩恵ばかりではなく

しかしながら、JABEE 受審に伴う各種資料の準備と作成については、やはり煩雑な部分も少なからず残っており、これは導入時に受けた「特別な資料は不要、ありのままを提示すれば十分である」という説明とは異なります。この点は、受審側である私たちが慣れることで解決するのでしょうか。

JABEE との今後のかかわり

二〇〇一年の開始時と比して JABEE の審査方法はとても明解になったように思えます。今度は私たち受審側が新たな工夫を凝らす番かもしれません。「国際的に通用するコミュニケーション基礎能力」の提示に、高専英語教員独自の指標が創出されるのも面白いかもしれません。

学生を直接指導する「現場」にいる私たちにはできない、独自の方法で、私たちの学生を正しく評価する手法を用意できるのではないかと、そう考えています。